



新編
語
言
材



童女 教訓 案間鄙言卷之三

十一 拂底か物ハ奇まじよまじ恋こゝろ

ハ雲うゑ沖抄おき又歌うたハよまじ事ことの物ものハ何なにの物ものハ奇まじよまじ恋こゝろ
にハ此こゝ事ことハ此こゝ記しありし仕しええをを運運。そそ水水が
仲なもも恋こゝろのの歌うたハ一ひと入いままむむつつししくくてて京極きやうごく黄門わうもん
ハ業わざ平朝へいあさ長ながのの杖つゑももせせずず好このもも好この夜半よはん歌うた
仰あやししてて。ううららししくく歌うたとと生せい時じのの心こゝろハハああららくく
祝いわひひしし。凡なん骨こつととああららくくよよ歌うたととししくくええああららくく

一。や。さねも。誠まことの意いといん。奇きハ。下したり。あま
 り。増ます。や。田舎いん邊鄙へんの男おとこは。皆みなは。奇きも。も
 恋こひは。あ。ん。ば。い。う。よ。せ。や。待宵まちよひは。侍従しやくじゆ。ゆ
 紫むらさきの加賀かがも。ま。其そのの身みは。ひ。や。一ひと車くるまも。水みづん
 感情かんじやうも。深ふかく。し。し。の。つ。名望なぼうも。さ。る。る。ぐ
 往昔じやうしやくといひ。大内おほうちハ。物ものも。風流ふうりゆうも。細こまと。の
 遊あそ迎むかよ。こ。び。と。り。玉垂たまりは。隙ひまも。足あしも。花はな
 夕ゆふ。暗部くらぶも。あ。ま。と。需光もちくわう。園てんも。い。ん。こ。の
 逢坂おうさか。恨うらみも。と。と。花はな。餘あまは。思おもひ。の。こ。の。葉は

よ。出いて。よ。ま。こ。せ。バ。實情じつじやうは。叶かひ。て。恋こひの。奇きの。正ただ々
 も。心こころも。時とき。所ところも。身みの。卑ひく。ま。こ。こ。の。こ。の。こ。
 う。り。今市いまいち中なかつの。ま。に。か。新事しんじを。表あらわと。見みよ。ハ。
 大内おほうちも。は。新あらたハ。朝あさの。中なかつ。活いき也なり。其そのは。り。る。を
 思おもひ。く。る。せ。武家ぶけ一統いつとうの。御代ごよも。う。つ。い。何なにも。も
 出いて。味あじ。嚴げん。く。は。け。し。る。事ことハ。あ。ぬ。ま。も。と。つ
 や。む。し。は。恋こひといふ。事ことハ。は。る。る。こ。の。こ。の。こ。の。こ。
 ま。り。り。坤あづまも。や。お。深ふかハ。人ひとの。氣性きせう。尖とが。り。て。腹中はらちゆう
 大おほき。ら。り。あ。り。り。あ。り。ん。思おもひ。神かみ。恋こひも。あ。り。り。は。ま。

編緝の録巻は脈息のいる病人一人もかく
 の深固は人知ぬ人ばかりしてよくとせん
 たり。稲葉の奥方一郭北斗は近よ行く
 天上より落るは美人を念は河くせ。浩然
 の氣は養ふおんの子は成るる。あま
 く見よ恋の明恋は歌とゆも己の心と恋よ
 せんらり。心と事あり。況や女房一人の
 口はもて感る下や。あまをさぐりて。何
 と移る歌と心と。志あり。建意の身より。

子恋は好む。郭也又隣の子や。後家とたか
 石我の名は。あまを。磯城島の子をい
 て。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 と何う。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 ひ。父母のあり。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 す。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 恋の身は。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 と。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 絶の絶。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 飛鳥川の。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。
 淵。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。あまも。

世に父兄をかりて。親をつとむる事多し。
 よむひてよむ身は悪人と思はれて。
 なんと切母求む。藏の道中叶く。
 心出ん事。その人法志の深さ。
 水の意のうちに。仇多の悪の身多く。
 事公何なり。事何んを。
 多し。その身は父兄より。
 ても人の情のたつた。

うき名やまゐん小夜更に我手抱え通ふ梅。
 少くも伊達氏の少娘人を。
 やうに記多し。

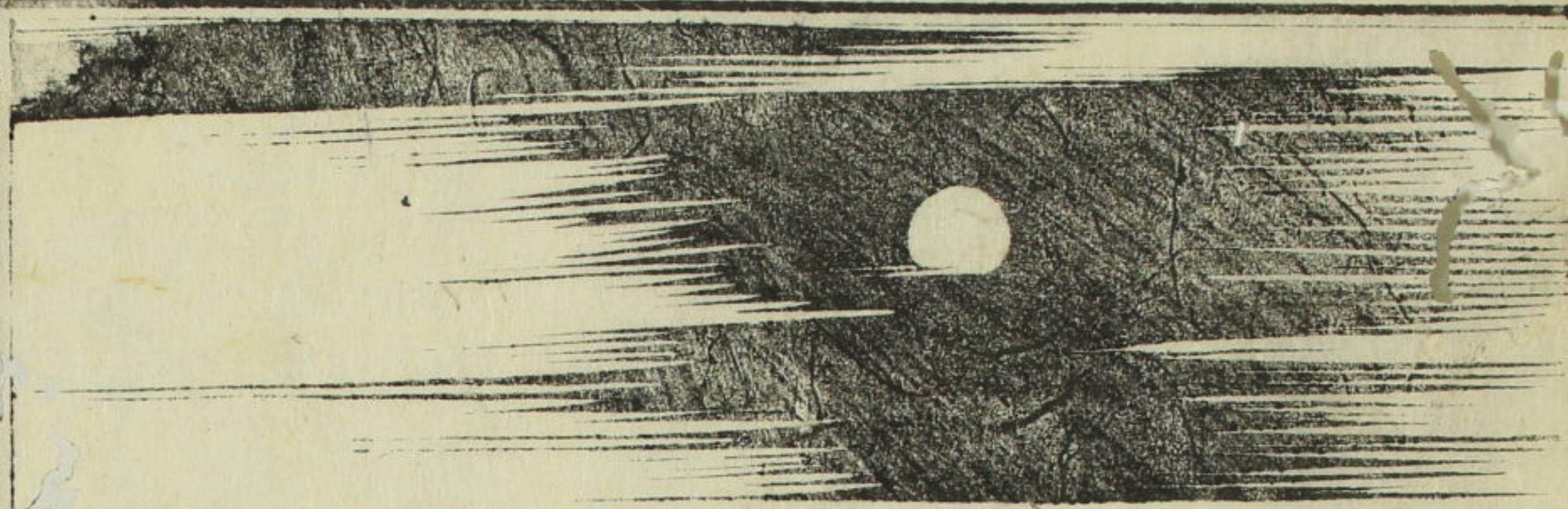
十二 珍布の女風

人法異なり。法師ハ弓を射。馬と乗。
 するもの。清きく。
 世に世に。



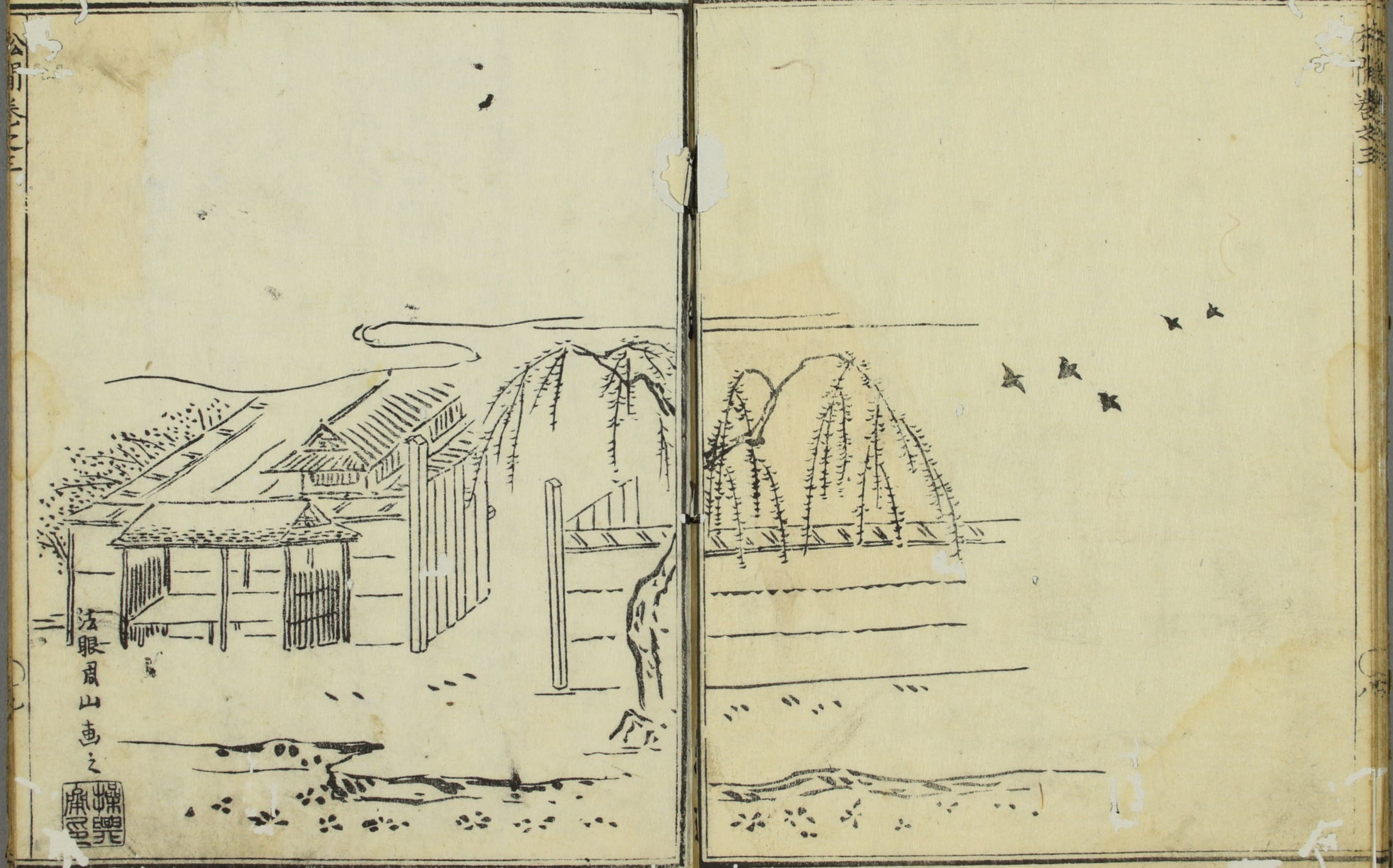
松
 風
 卷
 三

松風



負下成。堅愛も芥子酢止う。蘿蔔はら
 と尋ね。羽子板もぞんども。左義長とて
 下より。何もくささ成。町人は肩衣を
 歩行より。諸士の海ら。後の前常する。新
 くり。奇好の心あり。昔ハ遊女を本地を
 えやると。素顔とま。丈夫と指武は仕宿する
 女ハ。白粉とるも。礼我祝儀と。に。脂粉
 乃却ら。顔色とけ。すと。今ハ湯化粧
 か。少年。浮りて。白粉。白文盲。

あり。い。ある。起る。色。鏡と愛。下より
 一も。自。已。色。鏡と愛。下より
 出。高。人。卑。次
 まねと。素。人。の。す。高。人。卑。次
 希。口。行。風。流。華。奢。と。楽
 よ。ま。ね。む。ん。の。事。か。一。空。や。似。城。ハ。昨。日
 ハ。張。師。と。枕。と。今。日。ハ。素。席。と。念。次。同
 浅。き。浮。身。か。一。郭。の。去。更
 富。有。は。人。の。酒。宴。ハ。陪。一。高。貴



法眼周山画之



とやうく。将風流の情うらやま。掻ひく仇吉
 てつぎ口川。諸侯大使志令愛うらやまも
 何り。耻金さ。一郭はもの。歴史は。あま。侍
 走圍繞く。倡仰の歌。江傾く。水。今。盛。此
 執ひよ。見。人。是。と。羨。ば。ら。か。し。と。し。も。
 ちらす。葉。は。く。し。花。面。さ。下。よ。し。花。の。い。ろ
 う。いつ。つ。め。め。も。内。院。の。雨。の。音。原。負。樂。の。身
 より。百。倍。は。く。し。さ。あ。ら。し。も。價。よ。ま。う。せ。て。人
 又。後。子。稼。の。陋。子。半。ハ。い。あ。ら。ふ。子。是。り。身。信

此日に。銀と骸。江。又。替。よ。す。ら。し。も。天。秤。よ。掛
 う。り。ハ。燭。王。廳。は。御。棚。よ。似。て。お。も。は。ら。ら。ぬ
 と。萩。の。露。拾。り。消。之。と。す。玉。條。の。く。の。散
 け。て。あ。る。身。よ。飯。一。椀。も。多。く。と。す。免。ら。ぬ。と
 ら。ん。社。う。そ。そ。ね。は。方。は。譜。代。終。と。名。代。よ。無
 う。ま。し。う。も。長。一。大。さ。か。往。江。分。ん。と。お。り。あ。も
 可。免。は。屬。よ。上。向。さ。大。使。た。池。の。う。き。め。の。歌
 息。は。水。う。き。い。せ。ら。し。も。あ。ら。し。も。あ。ら。し。も。は
 鹿。哀。塵。女。節。あ。ら。し。も。の。浮。舟。は。く。し。と。あ。ら。ぬ

浪の巻を捲く。夕昏どに身もまはれ。弾三
味はつとせまなく。忘れぬ人の同らるをわが
ま命に延やせん。さねをまよひをばねねる
好友結のつとけ。暮る屋の通ひののすく
小石の中まおのひの有る。うら出ん事の時と
明らては影供を此小油をた。踊場は流
衣とさく。けつとつとつとぬぐよのあここと
此本御澤。七野社のくもはねる。流ねく
早さ年の矢は。師走は杉さく入目多く。かこ

よ人の稀き心。一川よみおぼりより。鹿塚
山の巻も成る。郭門の柳も首も々々ら
ま。よりの憂身ともさまふ。勤まて。性
空上人の油はぬ。西行法師が舌頭と坐断
や。室や江はは君もさす。うまが中も成と
観。大解脱とほつと勉がらうくさ
苦知織如魚

十四 龍念を残る百と帝は龍石

松月卷之三



三

茶虫圖

七十年あひてより上あるその世よは事こと々々。花洛はならく新しん居や友ま
島しま亦また。高たか市いちといふいるる杏あん花はな位い有ありく。能よみよんら
ののづももも花はな艶えん色いろとしひひ。一ひと夜よ辞こととり見みす
そのハか控こ忘わすれる事こと々々をせり。加かく今百ひゃく年ねんに
向むかへる。艶えん名な新しん中ちゆうは著とり。その人ひとは容貌ようぼう
進しん退たいの事こと々々のいひひ。貞せい操そう乃なり潔けつきき士し君くん
ふは花はな艶えんかもも物とも。義ぎのいまに命いのちと婚先こんせんの
婚こんふふは捨り申。同どうも衣は悲し事々々の
々々。その異い理り和わ理りと尋らに結むす好ごう居やれる事こと々々の

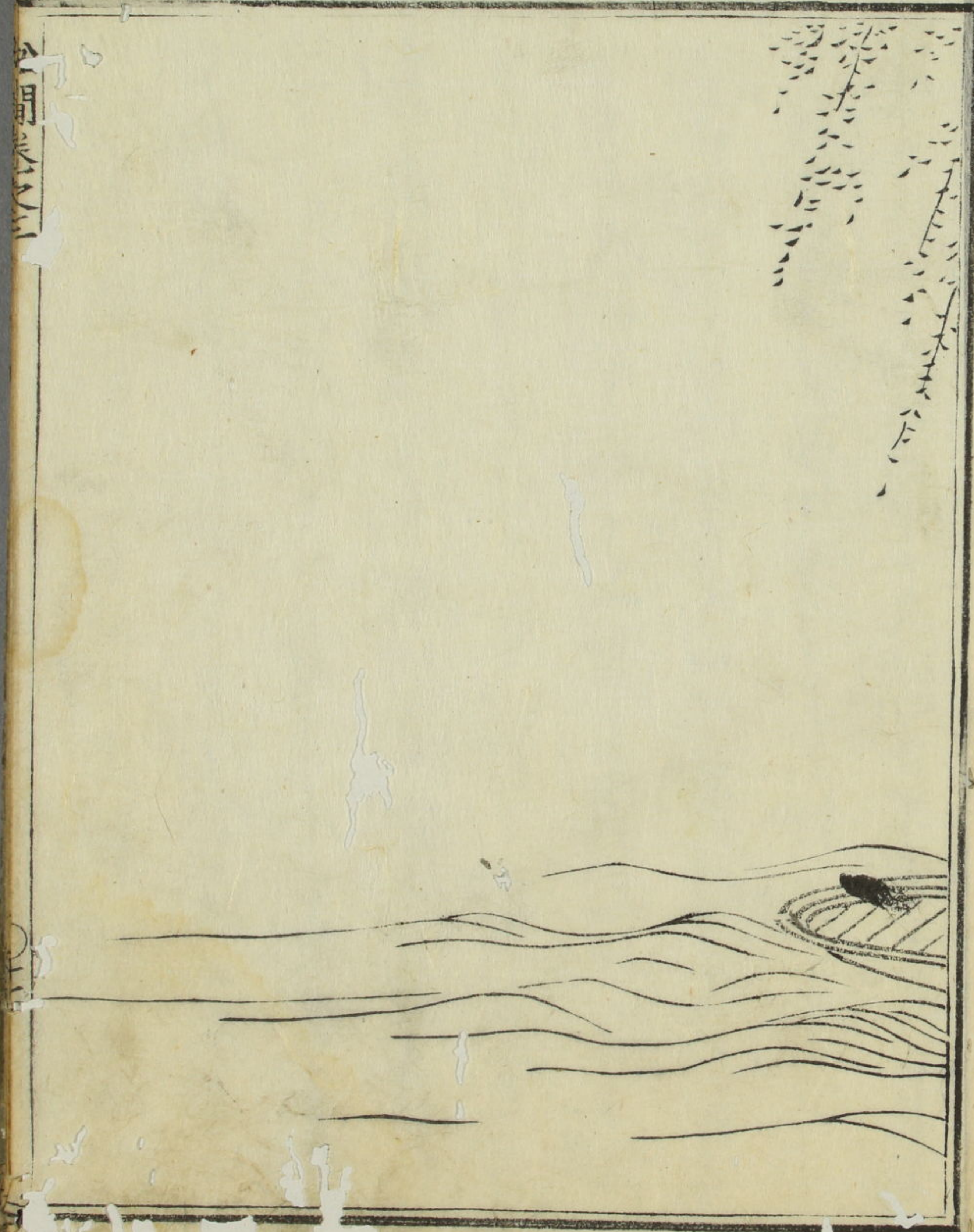
ふふふふののはは別べつ深しん。身み自じ契けいるる。主ぬしののふふ乃
疑うたがとも々々とも。卵たまごのの容ようハハ皆みな切きるる。今いまは
人ひともも淳じゆん名なと呼り呼家け主ぬしももののふふ々々々々
々々々々々々。只ただ是これは事々々々々のの事こと々々。一ひと所ところののふふ
々々志しは志。千ち曳ひのの名なもも々々々々。思おもひひははり
にに。男おとこののはは公こうののやや。水みづぐぐは成りて行ゆくく。
々々々々のの物もの々々々々々々。井いはは餘あま餘あま
枝えだももにに々々々々々々々々々々のの事こと々々々々々々。

公こう開かい卷まき六む三さん

五ご

いっしう卯の家法をまじり別初く。今ハ理を運ぬる
中よりほやせえぬれん。被許く文しく。志
くは使つてけりせし。も。徳前よか
こくも。まハ世を白より先の別際ありあどはば
わしそ。中へにけりて残る業地はひじさ。に
やうひとまきし。熱くあつて種一せし
九もたつり平家物語と講一ゆえしに。弘治前
は事とよきゆえ。苗ゆも。明りもはか
藝道の神といふ奇につきて。入道相國乃薄

懐しき心ばし。から公祐甲ハ丈夫とまきし。に
ゆりらうぬるなりあひしをゆえ。に
何よは好しく。その奇は九希の年し
船人よ書て書ひしは。地よ立ち屏風の揚
張く。今も目路よ見えゆえに。家身のしくは
成ゆえ。う。事限る。を
思飛くせむ。沙妻乃浅さかうして。誠かよ
人のそを信し。今文しく。人ト
あはれん。まもせし行ゆはまよひあは



柳時画

かめ〜一歩。寔は陋き遊女とい。雛節も帰ん
て死状様〜。巴城〜。み人を答らざる
や〜。事此此〜。今も彼里は年
舊の。流傳て青標は亀鑑とせりもし
る。か。去〜。目子逢つる。こ
り〜。社。の。身。と。社。の。名。
望ハ残〜。の。り。ん。が。名。は。〜。
せ。山。か。し。事。に。心。や。あ。〜。河。豚。ハ。喰。〜。
余。ハ。行。〜。い。つ。の。世。の。流。も。で。栗。ハ。搦。〜。

五 先〜心つ〜た勤

面國奥羽の豊凶と謀。二百十日ハ朔と何
又買込〜待ぬ。大壯から商賣〜ハとせ
も。得失と掛合〜。深〜。利分も有海
に。裏借屋の寡婦は一人子。洗粉白粉に
物。入。洗。下。志。踊。講。と。閉。〜。天。晴。〜。
万石は母親よせん〜。社。は。人。を。身。代。
の。相。應。乃。膽。の。膽。〜。成。程。は。合。次。才。

よして。匠吏より犯川く大身とわりの。侍渡は
 その例多く。噂も女の氏わけて玉の輿に
 乗るとん。それと目あは兼くハスス
 先ハ容儀も十人並の増えて。三味尺八も
 お意は仕留ひ。去申屋敷一々
 志づくは意は叶ひ多ね。日ました奢の
 付て。人と芥のどく見り。我慢嫉妬可
 角かりなく。夫御ドて申想領は儲の
 君と害せんとも。事顯れ。既ハ死刑子

至りし。由隠居徳の由説を。例宥めね水
 歩つ前より一棒は下は追放すね。天性の
 美色はま。残さね。人も捨てる世話して。
 一ふは青樓上一窓出ると。あはね。膏ら
 水行くと。は下は行ふ風流士のう。物
 よ。あひそ。それの亭席は招と擲ら。紅室
 ぐ枕と需る。志づく全盛ありし。の
 徒心より。日ました家後ハ。私情とりハ
 す人の。あはね。七重は。白妙も。眠る相違

松竹 卷之三
如く半^{おれ}憐あらずや。うゝその人法上の^えま
阿^あの^の^う。女^めの^の我^が慢^{まん}偏^{へん}執^{しつ}は心^{こころ}うゝ。若^{わか}の阿^あの^のま
は^は出^でく^くは^はを^を。所^{ところ}の^のま^ま—[—]を^を心^{こころ}法^{はふ}拙^{せつ}き^き事^{こと}先^{まづ}
と^と。ゆ^ゆを^をは^はの^の花^{はな}悲^{かな}—[—]む^むは^は志^しく^くは^は有^ある^る—[—]信^{しん}

松竹 悲言 卷之三 終

